

故郷世界と異郷世界の関係のダイナミックス

—— フッサールの生活世界論における目的論と事実性 ——

布 施 伸 生

本論は、フッサールの著作から、故郷世界と異郷世界を動態論的に捉えた構想を再構成して議論の基礎に据え、二つの論点、世界現出の目的論的性格と自己の存在の根源的事実性とを跡づけながら、故郷世界としての文化世界のあり方を考察する。

I

我々の生の営みにはそのつどの目的があり、その目的に応じて、存在者の総体が生活世界の地平として構成されている。つまり、生活世界の中に存在しうるものは、すべて目的に相関して決まり、それ以外のものは、たとえ当の目的から離れて考えられるとしても、存在しうると想定することには意味がない。この世界地平は、フッサールはこれを「特殊世界(Sonderwelt)」と名付けているが、生の目的が職業的に選択されたその場限りの目的であれば、専門家の世界であるだろうし、日常的な生活においては、目的の選択は意識されないが、文化的に規定された環境世界であるだろう。したがって、我々がその中で教育され成長した文化世界、その特殊性が問題視されない日常世界、つまり、「故郷世界(Heimwelt)」は、無論「異郷世界(Fremdwelt)」と共に、特殊世界として規定できる。この規定によって、故郷世界と異郷世界は、それぞれ、普遍的地平としての唯一の世界の一つの現れ方として、互に関係づけられるとともに、相互の隔たりも保証される。

故郷世界が認識と実践に対する地盤機能を果たすためには、あるいは、我々が日常生活を滞りなく送るためには、その世界の中に在りうるものに、何ら変わるところがあってはならない。しかしながら、文化の中に新しい種類のものが現れ、古い種類のものが消え去るということは、誰もが感ずることであろう。これは印象に過ぎないので、内容の検討が必要である。新しい種類のものの出現は、この場合、日常世界や故

郷世界という特殊世界の内部の出来事である。この点を顧慮すれば、異文化の中では在ると知っていても我々の文化の中では在りえないと考えていたものが、我々の文化にも在って構わないと思えるようになるといったことでも、新しい種類のものの出現の一つに数え入れられるので、その可能性を否定することはできない。それゆえ、新たなものの出現の可能性に対して何かしらの説明を与えねばならず、フッサールの故郷世界の動態論的論述がその手がかりになるだろう。

フッサールの考察も、当然、多様に変遷する文化世界に言及しているが、その言及が単なる事実の指摘に留まるのであれば、取り立てて問題にする必要もないだろう。しかし、ここで彼の考察が注目されるのは、その関連で、故郷世界の変容を「既知性地平の拡大」(XV 430)という形で理論的に分析しているからである。「既知性地平の拡大」は、フッサールによれば、二つの仕方になされる。第一に、「地平は、具体的に予描された地平様式で『外』の側へ拡大される。周囲世界は、環状に(球面状に)拡大された、より包括的な空間領分を獲得する。」(XV 430) この場合には、知識の増大はあっても、新しい種類のものの出現はない。しかし、それに対して、「この世界が、閉じた一つの人類(Menschheit)の周囲世界として確かに相対的に維持されたままであるが、しかし、人間の生では、開かれた外部の様式(Stil)を修正する、つまり、或る仕方でも『様態化する』拡大が動機づけられ構成されるという可能性がある。具体的な類比は破られて、——人類は、『異他的な(fremd)』人類との連繋に入る。」(XV 431) まさにこの場合に、様式の修正と共に新しい種類のものの出現が可能になる。

新しい種類のものは、それゆえ、様式を修正しなければ我々には理解できない。新しい種類のものとは、我々にとって「異他的なもの」であるが、フッサールも、それについて次のように述べている。「今初めて知られるか、あるいは、いずれそうなる異他的なものは、具体的な様式に従って即座に理解できるものではなく、すでによく知っているもののように即座に経験可能ではなく、即座に現実化可能で知識を生み出す経験地平を伴って一目で経験的に統覚されもしない。」(XV 432) そのように理解できないものが、様式の修正を経れば理解できるようになるのは、理解とは呼べないほど不完全ではあっても、何かしらの理解が、すでにできているからである。「異他的なものは、それでも、事物である。——具体的な類型に従って理解されるのではなく、ただ空間事物一般として、さらに領域的な経験類型か、そうでなければ最も一般的な経験類型に従って理解された事物である。」(XV 432)「事物」など、極めて一般的

で、それだけ未規定的な類型が、異文化の様式に従って、別の仕方ですべて具体的な内容を与えられて、それが我々のものになるということは、現実にあることである。そのような類型は、もともと我々の生活世界に属するのだから、この世界に変容する余地があったのだと捉え直すことができる。つまり、「……世界が改変の余地を残しているのは、明らかに、経験の調和的一致から私と我々に対して妥当している世界が、空間時間的な地平、可能的な個別的—実在的存在の地平を持っていることによってである。……空間時間的な実在の開かれた地平は、別の仕方での規定において、異民族とその周囲世界による占有を受ける。」(XV 216)

フッサールは、異他的なものが新たな様式で理解できるようになる過程にも論及している。「他者との連繫で私に存在妥当するようになるものを引き受けるたびに、すでに私に対して存在妥当する世界が、新しい意味規定を受ける。」(XV 463) さらに、彼は、他者にとって存在すると見做されているものを、我々が自分にも妥当するものとして引き受けることにより、つまり、参与の態度を前提にし、一方が語りかけ他方が応答することを通じて伝達共同体の結び付きが生じ、共通の世界が新たに形成されるという過程を記述した。そして、この結び付きはすべての社会性の根底に位置づけられた。しかし、異他的なものとは、ここでは、すでに誰かに理解されているものであり、新しい種類のものは、必ずしもそのようなものであるとは限らない。さらに、ここで記述される過程は、異文化の世界の中に飛び込んで生活を共にする場合に顕著のように、自分の文化世界の妥当性を括弧に入れることを前提にしている。この場合、得られる結果は、二つの文化世界の間に第三の特殊世界が形成されることである。これは、一つの文化世界が或る状態から別の状態になることとは異なる。にもかかわらず、この箇所は、様式が実際に修正される道筋を明かにしている点で注目に値する。

しかし、本論で重要なのは、新たな様式での理解の過程の詳細ではなく、むしろ、様式の修正のもたらす文化世界の変容の意味である。そこで、続いて、唯一の世界との関係を視野に入れて、その構図の中で、変化以前と以後の二つの生活世界を位置づけ、文化的変容の意味を解明してみたい。

II

文化世界は、すでに特殊世界として規定され、特殊世界は、そこで触れたように、唯一の世界の一つの現れ方に位置づけられ、それゆえ、別の現れ方である別の特殊世

界と関係づけることもできた。ここで、唯一の世界と特殊世界の関係に着目すると、両者の関係は、事物とその側面、同一の対象とその多様な現出の関係に比して次のように理解できる。つまり、同じ一つの事物が多様な現出様式で射映的に現出するように、唯一の世界は、多数の特殊世界において現出すると。⁽¹⁾

したがって、変化以前の文化世界とそれ以後の文化世界は、我々が、事物の経験で、次々と見ていった二つの側面と比して理解される。この類比的理解は、さらに進めて、「様式を修正する拡大」としてすでに見てきたことについても、説明を与えることができる。つまり、新しい種類のものに不完全な理解しか得られなかったことは、この類比によって、我々が現在占めている位置から事物の或る側面を見ていて、これから自分の位置を替えて見ようとしている別の側面が、実際には見えていずに在ることしか分らないということに対応させることができる。そして、それが理解できるようになることは、我々が実際に動いてみて事物の別の側面を見ることに比せられる。それゆえ、我々が動きながら一つの事物の様々な側面を見ていくことは、その事物をより良く知ることになるのだから、それと類比的に、我々が、異郷世界との接触などから新しい故郷世界の中に住むようになることは、唯一の世界をより良く知ることの意味すると考えることもできる。この考え方は、フッサールの書いたものの中にも見出せる。「世界地平は、経験によってますます新しい占有を獲得し、それに対応する修正と予描を獲得する。……人間は、進展する経験によって、自分の相対的な周囲世界を踏み越えて、世界をますます良く知ようになる。」(XV 232) こうして我々が唯一の世界をますます良く知ようになることは、事物の経験が、一つの事物をすべての角度から一度に見るという実現不可能な完全性に向けて方向づけられているのと同様に、唯一の世界の完全な現出を目標にして展開する過程として、それゆえ、目的論的過程として捉えられる。そして、さらに、事物の理念が、無限に多様な諸規定の統一体として新たな規定をつねに許すように、唯一の世界も、新たな特殊世界の出現という形で別の姿を現す余地を残していると、換言すれば、その目的論的過程が無限に展開するように開かれていると考えられる。

こうして、特殊世界の転換を説明するさいに解明された目的論的性格は、それぞれの特殊世界の内で生活を営む人々のあり方に対応していて、そこにも、それと相関的な発展過程を見出すことができる。むしろ、完全な理解への接近という特徴づけは、本来、そのような人々のあり方の側に与えられるべきかもしれないし、「既知性地平

の拡大」のような生活世界論の構想も、この主観性理論との関連なしには成立しないかもしれない。つまり、これまでの考察の中にも、特殊世界の相關者である間主観性への関連が、すでに視野に入っていたのだと考えられる。

フッサールは、確かに、間主観性の現象学的考察という意味では一つの同じ枠組の中ではあるが、それでも、特殊世界と唯一の世界の關係に関する先の類比的理解とは別に、少なくともそれに基づいてではなく、間主観性の存在を目的論的過程の中で考察している。例えば次の箇所では、超越論的主観性の存在を生成変化の中に置いている。「……超越論的歴史の中で、超越論的主観性は、本質的に生成し(werden)たものであり、生成していて、この生成しつつあり―生成し終えたことにおいてその恒常的な存在を有し、永遠の超越論的発生において無限に生成しつつある。超越論的主観性の存在は、歴史的存在である。」(XV 392) そして、この生成の過程を、真理という目標への接近として把握する。「この目的論的過程、つまり、超越論的主観性の存在過程は、普遍的であるが、個々の主観ではさしあたり曖昧とした『生への意志』、あるいは、むしろ真なる存在への意志を担っている。」(XV 378) この言葉から窺い知ることのできるフッサールの着想は、唯一の世界と特殊世界の類比という構図の中に当てはめることによって、理解しやすいものになる。つまり、超越論的主観性が、間主観性に組み込まれ、歴史的変遷の中にその存在を持つことは、我々が事物を知るために動き回ることに対比することができる。そのさい、我々が動き回るのが、事物をより良く知ろうと思ってのことであるのに対して、特殊世界と間主観性の相關的な運動過程にも、類比的に「真なる存在への意志」が存在すると理解される。

ここまで、フッサールの書き残したもののから一つのまとまった構想を再構成しようとしてきたが、以上の解釈を基にして、その考え方の持つ問題点を指摘しながら、さらに世界現出の目的論的過程を詳しく規定してみたい。検討の端緒としては、フッサールが世界現出の運動に進歩の概念を与えていることを取り上げることが良いかもしれない。つまり、彼が世界現出の運動を目的論的過程と特徴づけている記述を見ると、特殊世界としての文化世界の変容に、それを動機づける目標が存在するというだけでなく、文化世界が変容することでその一定の目標に接近していて、そこに前進や進歩があるということも、言われているように思われる。そのような含意は、すでに引用した箇所に限っても、「拡大」、「ますます良く知る」という言葉にははっきり表れている。もちろん、世界現出の運動は、進歩として規定できるのだと思われる

かもしれないが、それは、改めて論議されるべき論点である。しかし、我々がすでに唯一の世界と特殊世界の類比的理解を基にして考察してきた範囲で、それを主張するのは難しいのではないか。つまり、先の類比に戻って考えると、事物の側面が、見られる順序に関係なくどれも同等のものであると同様に、故郷世界、あるいは、それぞれの時代の世界観は、唯一の世界の現れ方の一つとしては、同じ価値を持つはずである。それゆえ、進歩の概念を積極的に与える理由は、この類比には見つからない。また、過去の世界観に関する知識が増えることによって、過去との繋がりや未来への展望を強めることができるかもしれないが、それは理論的可能性であって、その実現は歴史的状況に大きく依存する。さらに、そのような進歩性の含意は、世界現出の運動の或る一面を強調し過ぎているように思われる。つまり、「既知性地平の拡大」などの言葉が用いられることによって、世界現出の運動の別の一面が覆い隠されているようである。というのは、新しい種類のものの出現は、事物経験においてそれまで見えていた側面が見えなくなるのと同様に、古い種類のものの消失を伴っているはずだからである。

この進歩性の含意は、確かに、先の類比によれば、様々な角度から見る事が事物をより良く知ることを意味するという事に支えられている。それでは、一体誰が、唯一の世界を知るのだろうか。我々は、世界現出の目的論的過程の中に、変遷する文化世界の相関者として、「人類」、「我々すべて」という間主観性をフッサールに倣って設定しているが、しかし、それに主観や観察者の役割を与えることができるのだろうか。まさにここに第一の問題点を指摘することができる。問題の類比的理解の主題は、その導入のさいに触れたように、唯一の世界と特殊世界の関係であった。それゆえ、唯一の世界が、現出する事物のようなものであり、それと相関的な間主観性も事物の観察者のようなものであるなどと、当の類比から考えてはならない。さらに、フッサールは、生活世界を「唯一の世界の現出様式」(XV 177)と呼ぶとき、「人類が複数形の可能な意味を持つ」(XV 177)ことを前提にして、それゆえ、現出様式としての特殊世界のそれぞれに「人類」を対応させていた。したがって、唯一の世界をより良く知る過程に在るとされるのは、そのような複数の「人類」ではなくて、その過程全体を一貫する間主観的な存在、言わば唯一の人類ということになるだろう。文化世界の変容が我々に体験されるのだから、複数の人類の間に統一性が保たれていることは確かである。しかしながら、唯一の人類という概念を明確に抱いて、その上、

唯一の人類の立場に自分の身を置くことを想像することは、未知の特殊世界の中に自ら入っていくことを繰り返しても、覆い切れず、そこには無理な飛躍があるように思われる。それゆえ、唯一の人類の立場で進歩を主張するのなら、それにふさわしく精巧に組み立てられた議論が必要である。もちろん、だからといって、世界現出の目的論的過程という枠組全体が疑義に晒されるわけではなく、疑わしいのは、その過程に暗に与えられた進歩の概念なのである。

文化世界の中で生活を営む人々、換言すれば、多くのうちの一つの人類について変化と統一が認められるとしても、そのような間主観性に「真なる存在への意志」を担わせることは、文化変容を内部で体験する者が当然持つだろう感情、つまり、自分は変化を受け入れざるをえなかったのだという感情に反していないだろうか。これを第二の問題点に挙げたい。事物経験では、一つの対象の回りを自由に移動して事物の多様な現出を得ることができるのに対して、問題の世界現出の場合には、そのような自由さはなく、見せられるという表現の方が適切かもしれない。この相違にもかかわらず、これまで見てきた類比を推し進めて、文化の変遷という運動の起因として、「より良く知る」という主観的要因を説明に用いることは、フッサールの理性の目的論を主題にして彼の人間観や歴史観を検討すれば別の結論が得られるかもしれないが、ここでは短絡的と言わざるを得ない。世界現出の動的過程の起因は、そのような間主観性の側からではなく、むしろ、特殊世界の側で、一面的現出と完全な全面的現出との関係によって説明されるべきかもしれない。つまり、世界現出が目標に向けて展開するのは、事物の或る側面が別の側面を指示するのと類比的に、我々の故郷世界が新たな文化世界を言わば指示していることによってなのである。事物経験も世界現出も、そのような指示連関から展開される。生活世界論が主題であれば基本的にこの説明で十分であって、主観性理論との関連に論及して大きな難題を抱え込むことは不必要であろう。しかし、その場合、我々は、特殊世界内で運動を動機づける局所的要因のことを、目的、目標という言葉で呼んでいることになり、それが言葉の通常の用例から離れていることは、認めなければならない。

III

これまで見てきたように、事物の経験との類比を利用すると、故郷世界と異郷世界の動的な関係に対して説明を与えることができた。しかし、他方で、両者の類似性に

依拠する考察では、世界現出の運動について明らかにすることのできない一つの側面がある。したがって、事物の経験との対比という大きな枠から出るわけではないが、これから、両者の相違点に注目することによって世界現出の運動の或る一面に焦点を当てて考察してみたい。

事物経験と世界現出の運動の間に見落とせない重要な相違点は、我々が、前者の場合、或る事物を見ることを止めて別の事物に目を移すことができるのに対して、後者の場合、現在我々が関係している世界現出の目的論的過程から、それとは別個の過程の上へと自分の身を翻すことはできないということである。というのは、事物の場合とは違って、唯一の世界に対しては複数形が無意味だからである。このことは、もちろん、我々の現在の人類だけでなく、過去の人類にも未来の人類にも言えることであり、そのような歴史の流れの中で世界の唯一性を理解しなければならない。したがって、唯一の世界を事物に喩えて言えば、我々がすでに見ている或る側面から構成される一つの事物しか、過去から未来に渡って、我々の対象になりえないということになる。この点から、世界現出の運動全体が、我々の現実の事実的な有り様によって何らかの仕方では決定されていると帰結することができる。つまり、我々は、実際に世界現出の目的論的過程に関与するさい、唯一の世界との破棄できない関係を前提にしている、したがって、我々はその現実的な関係の外に出ることはない。さらに、世界現出の目的論的過程は、超越論的間主観性の生成過程と同一のものであるので、その帰結は、間主観性の生成過程が我々の事実的な存在に条件付けられていることを共に意味する。このような論点として、フッサールは目的論と事実性の関連に論及しているので、事物経験との対比から簡単に素描できた事実性の問題連関を、今度は詳細に規定するために、超越論的主観性の事実的な存在に関するフッサールの思索を参照したい。確かに、主観性の理論を引き合いに出すことは、前述のように、世界現出の運動の起因を説明するためには重大な問題を孕らんでいたが、しかし、ここでは、目的論と事実性の関連を明らかにするために、超越論的主観性の存在の事実性を主題にする必要がある。

フッサールは、次に挙げる箇所では、目的論が事実性を前提にすると述べている。

「事実の内に、あらかじめ一つの目的論が生じることが含まれている。一つの充実した存在論は、目的論であるが、それは、事実を前提している。私は、必当然的に存在し、世界信念において必当然的に存在する。私に対して、目的論を露にする世界性

が、事実の中に超越論的に存在する。」(XV 385)

このように目的論と事実性の関連は、確かに取り上げられているが、しかし、事実性ということで何が言わんとされているのか。これに続く箇所では、フッサールは次のように述べている。

「私が事実に遡及的問いをするときに、本質変更の作用など、私の事実的能力に対してしかじかの私に固有な原要素が私の事実性の原構造として明かになる。そして、私は、本質の諸形式において、つまり、可能的に機能することの形式で、『原偶然的なもの』の核を自らのうちに持っていて、その形式に、さらに、世界の本質必然性が基づけられている。私は、私の事実的存在を、そこで、志向的に含まれる他者の共存在など、それゆえ、絶対的な現実性を踏み越えることはできない。絶対的なものは、それ自身の内に自らの根拠を持ち、その無根拠の存在において、一つの『絶対的実体』として絶対的必然性を持つ。その必然性は、偶然的なものを残しておく本質必然性ではない。」(XV 386)

この箇所が目されることは二点在る。第一の論点は、他者の共存在を事実性として越えることができないとされることである。それは、何よりも、前の考察に反するかもしれない。とりわけ、「他者の共在を踏み越えられない」という言葉を、先に挙げた中から「自分の周囲世界を踏み越えられる」と引き抜いて並べると、この疑念は明確になる。つまり、現実と共に在る他者を除いては何も存在すると考えられないなら、現実と共に在る我々の属する生活世界を離れて、新たな他者との共同を見つけることも、ありえないことになる。しかし、ここで「踏み越えられない」を、前提せざるをえないと言い換えると、他者の事実的共在を前提にせざるをえないことは、その前提の上で主観性存在を歴史的に展開させることと両立不可能なことではない。さらに、言うまでもなく、現実的に在るということの意味は熟考せねばならない。それゆえ、我々は、事実性と目的論として主題化された事柄について、前者を後者の前提と規定することによって、そのような一見相い反する論述に整合的な解釈を与えることができる。それだけに、我々は目的論の考察から事実性の問題に論及せざるをえない。もう一つの点は、ここで問題になっている超越論的主観性の実事性が必然性を備えていることである。それゆえ、事実的と言われてもそれは普通の意味においてではなく、その意味を明確に規定しなければならない。それによって、第一の論点との関連で、どのような事実性として他者の共存在が越えられないかも明かになるだろう。

う。そこで次の草稿も参考にしたい。

「私、つまり、思考の中で変更する私、事実的な現実性から〔変更によって〕自らを解放する私は、必当的に、事実的な現実性の自我であり、とりわけ形相的に思惟し洞察する自我として私が事実に獲得した能力の自我である。自我の形相の変更体として想像可能なものは、自由に空中を浮遊しているわけではなく、私の事実における『私』、私の生き生きとした現在〔!〕と共に在る『私』に構成的に関係している。その生き生きとした現在は、私が事実に生きる現在であり、露呈可能なものとしてそれの中にあるすべてのものと共に必当的に眼前に見出される現在である。——それゆえ、超越論的現実性の必当的構造は、思考の中で変更するあの能力のために、偶然的である構造ではなく、——『同様によく、ありえただろう』別の可能性の本質枠を持つ偶然的事実ではない。」⁽²⁾

ここで事実性に特別な意味が与えられるのは、端的に言えば、「超越論的自我の形相は、事実的なものとしての超越論的自我なしには考えられない」(XV 385)からである。つまり、「私の存在は、私に対して存在と意味を持つあらゆる存在にとっての必当的根拠である。」(XV 383) したがって、超越論の主観性の事実的存在は、事実という言葉が普通の意味で用いて、事実と本質を区別することの根拠として、それに行っている。この先行性ゆえに、その根源的な事実に対しては本質を語ることができない。そもそも、我々は、我々自身の存在に対して、別の存在可能性を想像しようとすると思惟の限界に突き当たり、別の可能性を伴わない必然的な存在が我々の眼前に現れるのである。このように、この根源的事実性は、我々の思惟の限界として特徴づけられる。⁽³⁾

フッサールの意図した事実性の考察の射程は、我々が世界現出の目的論的過程を主題にして確認した事実性の関連を遙かに越えているが、それでも、我々は、世界現出の目的論的過程を考察するさいに、フッサールの考察を参照することができ、それによって、問題の事実性とは、どのようなことなのか、明かになってきたと思われる。そこで目的論と事実性と呼ばれ扱われていた事柄は、新たに、我々と文化世界の相関関係が有する開放性と自己中心性とも言い換えられる。このような見通しはフッサールの言葉の中にも窺われ、後に一つの箇所を挙げておく。さらに踏み込んで、開放性と自己中心性として我々に意識されていることを、フッサールは、これまで見てきた形で現象学的に分析しているとも言えるであろう。この観点から見ると目的論と事実

性の関連性が強められ、事実性をここで問題にした意義が大きくなるのではないか。そして、本論がフッサールの文献学を越えた意義を持つとすれば、ここにあると考えられる。それゆえ、そのような関連を最後に指摘しておきたい。

「超越論的間主観性がある存在を保持し展開させる超越論的構成の無限の動きの中で、この世界は、私の人類全体にとって中心的な人間である私に対しての世界として構成されているが、この人類は、別の複数の人類の開かれた地平を持つ人類である。この地平性は、経験という仕方では本来的に私に継続的に現出する万有の空間時間的実在から万有が地平的に与えられていることと不可分に一つのものになっている。」(XV 467)

『フッサール著作集 (Husserliana)』からの引用は、巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で、本文中の括弧内です。

註

- (1) Vgl. Klaus Held, Husserl und die Griechen, in: *Phänomenologische Forschungen* 22, Freiburg/München, 1989, S.168. さらに、フッサールの特殊世界概念の解釈に関しては、解釈の問題点も含め、同著者の次の論文の箇所を参照せよ。Heimwelt, Fremdwelt, die eine Welt, in: *Phänomenologische Forschungen* 24/25 Freiburg/München, 1991, S.326ff.
- (2) Ms. K III 12, S.34f., zitiert nach Klaus Held, *Lebendige Gegenwart*, Den Haag, 1966, S.147f. この引用で、括弧内はヘルトによる補足。傍点での強調は同書に従う。
- (3) ラントグレーベは、フッサールの事実性の概念を、反省の限界として明確に特徴づけている。「私が何であるか、我々の内の各々が何であるかについてのこの規定、『原事実』によって、超越論的現象学の反省が突き当たる限界が表されているとすれば、そこで、そこから何が帰結するか問われるべきである。それは、フッサールが、私は在るという事実の事実性として、事実性を規定していることである。」(Ludwig Landgrebe, *Faktizität als Grenze der Reflexion und die Frage des Glaubens* in: *Faktizität und Individuation*, Hamburg, 1982, S.121.)

〔日本学術振興会特別研究員〕

Die Dynamik vom Verhältnisse zwischen Heimwelt und Fremdwelt

— Teleologie und Tatsächlichkeit in der Lebenswelt-problematik
bei Husserl —

Nobuo FUSE

In dieser Abhandlung handelt es sich um die Erweiterung der Heimwelt zu der Fremdwelt. Die Kulturwelt wie Heimwelt ist als der interessenbedingt, relativ geschlossene Welthorizont, nämlich Sonderwelt bestimmbar. Aber Die viele Sonderwelten gehören als die Erscheinungsweisen der einzige Welt zusammen. Und die einzige Welt erscheint so in den vielen Sonderwelten, wie ein identischer Gegenstand in den mannigfaltigen Erscheinungsweisen erscheint. Daher können wir für die kulturelle Abwandlung der Heimwelt eine phänomenologische Erklärung abgeben. Die Abwandlung besagt dann den teleologischen Prozeß, in dem die einzige Welt gleichsam erscheint. Wir erwähnen noch die ursprüngliche Tatsächlichkeit der transzendentalen Subjektivität als die Voraussetzung der Teleologie.